

るんびに

第八十三号

楊林山 正光 寺

波多正文

尼崎市東大物町1-3-7
(06) 6481-3253

報恩講

報恩講とは、浄土真宗の開祖である親鸞聖人

(一一七三〜一二六一)のお徳を偲ぶ、浄土真宗の門信徒にとって一番大切な法要であります。

今、生きている私たちのもつとも大切な心の拠り所である阿弥陀如来の御本願を九十年の生涯をかけて伝え示して下さった親鸞聖人のご功績、ご遺徳を偲び、いのちのありようを聞かせて頂く法要です。せっかく賜った人生だからこそ、その深さを知り、充たされた瞬間を生きるご縁に、一緒に遇わせていただきましよう。

「親になるより早く 親になるより早く」

熊本県布教使

吉村隆真 師

この本が出版される頃には、私は一児の父親となっていたでしょう。妻はやがて臨月を迎えようとしているのですが、この期に及んでもまだ、私には親になる実感があまり湧いてきません。けれども、悠長な夫とは対照的に妻は違うようです。「私はこの子をお腹に授かった瞬間からすでに母親よ!」そう言われて苦笑した経験があります。母親というのは偉大ですね。経典の中に「五逆」という言葉が出てきます。人間として生まれた以上、これだけはしてくれるなという厳しい言葉です。その中に「父殺し・母殺し」という罪が

あります。つまり、自分の親を殺めるといふ罪です。最初にこのことを知った時、私は正直「そんなことは、世間を騒がせるような一部の人間がしかすことだ!」と気にも留めませんでした。しかし、今になってこの言葉の本意が少しわかった気がするのです。私が本格的に親元を離れたのは、高校を卒業して、大学に入学するときでした。合格の知らせが届いたときの喜びは大変なものでした。しかし、その喜びの中身は、「大学で思う存分勉強が出来る」や「受験勉強から解放される」という類のものでなく、「これで親元を離れられる」という不純な思いでした。近くにいた母の顔に目を向けると、嬉しさの中にかすかに浮かない表情を覗かせていたように記憶しています。やがて春を迎えました。入学式や新しい生活の準備のために、母も一緒に上洛しましたが、時間は瞬く間に過ぎ、母一人が帰る日を迎えました。新幹線の改札の前で、最後の名残を惜しんで、他愛もない会話を暫く続けたように思います。しかし、それも長くは続かず、母は意を決したように「じゃあ元気でね……」と言葉を残し、改札の中へと入ってゆきました。小さくなってゆく母の姿を、私は何気なく見つめていました。すると、普段は滅多に走ったりすることのない母が、その時ばかりは、プラットホームへと続く長い階段をトントントントン……と小走りに駆け上がってゆくのです。それまで、別れの名残を惜しんでいたのが嘘であるかのようになり、それどころか、一刻も早く私の元を立ち去ってしまいたいかのようになり……。その姿が見えなくなろうとしたとき、母の背中越しに、頬を伝う涙を拭いている仕草が覗きました。私は思いました。「考えてみれば、今まで近くにいなながらも心配させてきたんだな。そして今度は離れたところから、今まで以上に心配させることになるんだらうな」と。その時の情景は、未だ鮮明に脳裏に焼きついて離れません。その自分に立ち帰って、改めて「五逆」の意味を問うてみたときに、私の中で何か変わるものを感じました。確かに私はこ

れまで、親に対して刃物を向けた憶えも毒を盛った憶えもありません。しかし、生まれてから今日まで、こうして生きてくる間、一体どれほど親の命を縮めながら、親に命の縮むような思いをさせながら生きてきたかを問われたとき、「五逆」の罪人がどこかの誰かの話では済まなくなってきたのです。その思いは、自分が親になろうとする今、いよいよ強く感じられます。浄土真宗では阿弥陀さまを親さまと仰ぎます。その仏の子である自分自身を問うてみると、阿弥陀さまのお心に適うような生き方ができているとは、恥ずかしながら到底思えません。それどころか、阿弥陀さまにいのちの縮むような思いをさせていることの方がはるかに多いのが私たちかもしれません。まさに、五逆の中に説かれる「仏身を傷つける行為」そのものとも言えましよう。もちろん、阿弥陀さまは寿命無量の仏さまでですから、いのちが縮むなどという表現は不適切ですが、こちら側の思いとしてその限らない阿弥陀さまのいのちさえ縮めかねない私の姿がそこにあるということなのです。それでも、阿弥陀さまは、五逆の罪を逃れられないこの私をご承知の上で、「そのまま来なさい」と喚び続けてくださっていたのです。親なればこそです。そのまま」と喚ばれた私が、その安心の中にも、「本当に今のままの自分でよいのでしょうか?」と尋ねながら、そしてまた「そのまま」と喚ばれながら生きてゆく。阿弥陀さまと私のこの永遠の呼応こそが、浄土真宗という仏道なのでありましよう。

◆ 報恩講法要

十一月一日(土) 午後二時〜四時

午後六時〜八時

十一月二日(日) 午後二時〜四時

◆ 講師 藤栄 行信 師

◆ 歎異抄を学ぶ会

毎月第三土曜日 午後二時〜三時三十分